

webun.jp

「木彫刻の町」 シンボル 井波美術館 存続ピンチ 非耐震で市「維持困難」 | 北日本新聞ウェブ[webun ウェブン]

マイスクラップ

2 minutes

南砺市井波地域の彫刻家を中心にした作家の発表の場として親しまれてきた同市井波美術館が、存続の危機に立たされている。耐震構造になっていないため、市は公共施設としての維持が困難と判断し、運営を担っている井波美術協会と譲渡に向けた協議を進めたものの、合意に至らなかった。購入者を改めて公募することになっているが、受け手を確保できるかどうかは不透明で、30年の歴史に幕を下ろす可能性が出ている。（南砺総局長・宮田求）

この美術館の建物はかつての北陸銀行井波支店。大正末期の1920年代半ばに建設されたルネサンス様式の鉄筋コンクリート造りで、歴史的価値が高いとされる。

旧井波町に引き渡された後、地元作家らの寄付金などで改修し、87年に美術館としてオープンした。以来、井波美術協会有志らで運営。井波を含む8町村合併で南砺市が誕生した2004年以降は、市が建物を引き継ぎ、この運営方式を維持してきた。

井波別院瑞泉寺に通じる八日町通り沿いにあり、５月に文化庁の日本遺産に認定された「木彫刻の町・井波」の象徴にもなっている。

地元作家の愛着は強く、運営者を公募する指定管理者制度の導入が見送られた経緯がある。入場無料とし、市からの年間１８０万円の補助金や会費で運営している。

建築から約９０年がたち、老朽化が進む。耐震化されていないため、安全面の不安があり、市は公共施設としての維持は困難と判断。１５年から、同協会への譲渡に向けた協議を進めたが、維持管理費などの負担が大きいため、引き受けてもらえなかった。

これによって、同協会による運営は来年で打ち切られることになった。同協会の川田良樹会長は「メンバーの高齢化が進んでおり、やむを得ない決定だった」としている。

市は年明けにも、譲渡先を公募する。耐震補強が迫られるなどの課題があり、新たな運営者を確保できる見通しは今のところ、立っていない。公募を経て、購入申し込みがなければ解体の方向となる。

■南砺「聖域なき行革」 クライミング施設縮減も

南砺市は井波美術館のほか、城端地域の桜ヶ池クライミングセンターの譲渡に向けた手続きに入っている。スポーツクライミング競技のメッカと位置付けられる施設を縮減対象とし、「聖域なき行革」に決意をにじませる。

同センターは２０００年にオープン。高さ１５メートルの壁を備えた本格的な施設で、ＪＯＣジュニアオリンピックカップなど各種大会に活用されてきた。総合型スポーツクラブ「クラブＪｏｙ（ジョイ）」が指定管理者として運

営している。

市は同クラブへの譲渡に向け、協議したが、維持管理や将来の補修などの負担がネックとなり、不調に終わった。さらに10月末まで2カ月にわたり、譲渡価格約3300万円で市内から購入希望者を募集したものの、申し出がなかった。現在、市外に対象者を拡大する準備を進めている。

市が施設の売却を急ピッチで進める背景には、公共施設面積の半減を打ち出した再編計画を着実に実行しなければ、健全財政が維持できないという危機感がある。ただ、人口減の中、いずれの施設も採算性確保は難しく、担い手が見つかりにくいのが実情だ。